

このような症例では術後積極的に開口練習させるべきでしょうか。

回 答：関山 三郎（第二口外）

開口訓練は術後なるべく早い時期から行った方が良く考えています。もう1つは、術式の問題で、咬筋、側頭筋の附着部をどう処理したかが、かかわっていると思います。

追 加：工藤 啓吾（第一口外）

術後の開口制限の原因として咬筋附着は特に関係していないように思う。

演題2 20-methylcholanthrene による横紋筋肉腫の発生

○ 畠山 節子

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

芳香族炭化水素の20-methylcholanthrene (MC)を用いて横紋筋肉腫を誘発し、発癌に至る経時的变化を特に筋原線維に注目して観察した。

動物はDD系マウス（体重15—25g）を用い、MC結晶粉末 0.2mg/匹（0.08—0.013mg/g）を左側頰部咬筋組織内に直接埋入した。2, 4, 10, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90, 100, 120, 136日後に数匹ずつ屠殺し光顕ならびに電顕標本にした。〔結果〕埋入部組織の発癌までの変化は大概4段階に分けることができた。(1), 0—30日, 変性破壊期。2日群では滲出物, 好中球を主とする円形細胞浸潤, 筋細胞の壊死が著明であるが, その後破壊領域は徐々に縮少し対照群では筋肉組織の修復は30日群で完全となった。電顕的には筋細胞の壊死, 筋原線維の横紋構造の崩壊と部分的配列異常, 筋小胞体の膨化と機能的配列の崩壊, ミトコンドリアの集積像, 幅の広いZ帯の蛇行像などの変性像が見られた。(2), 4—80日, 再生期。細胞中央部に数個の核が並ぶ筋細胞および小型の筋細胞がMC近接部まで再生してきた。電顕的には Satellite cellの活性化（豊富な遊離リボゾーム, 核染色質の分散像）, Satellite cellの筋細胞からの離脱像, myotubeなど再生時の所見が得られた。(3), 50—90日, atypical cellの出現期。筋細胞間に惰円形大型核を持つ紡錘形細胞が出現し結節状増殖を示した。60日と70日群の電顕所見に筋原線維を有する有核細胞内あるいは筋原線維を有する細胞内に染色体が存在する異常な分裂像が認められた。(4), 70日以上, 腫瘍発生期。18例の横

紋筋肉腫が発生した。腫瘍細胞は細胞内線維の微細形態に基づいて 1)部分的に横紋を形成する 2)thickとthinのmyofilamentが存在する 3)しばしばdense bodyを持つ微細線維束を持つ 4)線維を持たず遊離リボゾームの豊富なもの 5)核近傍部に70—100ÅのSingle filamentの網目を形成するものの5型が観察された。

質 問：工藤 啓吾（第一口外）

1) 癌腫ではなく肉腫を発生させたのは、何か特別の目的があったのでしょうか。

2) 筋肉内ではなく上皮内に発癌物質を作用させると癌腫が発生するのか。

質 問：大屋 高徳（第一口外）

1) どこに20-methylcholanthreneを埋入したのか。

2) 顎骨をおかした例もありましたか。

質 問：伊藤 忠信（歯科薬理）

MCは発癌性物質ですが、コラーゲンに対してはどうでしたか。

回 答：演 者

1) 高度に分化している横紋筋細胞は、腫瘍化の過程でどのように崩壊するのか、あるいは腫瘍細胞ほどの程度筋原線維形成をするのかに興味を持ちました。

2) 皮膚に塗布した場合、皮膚癌をつくるという報告があります。

3) 18例のうち腫瘤の大きいTumorでは(2例)、やや顎骨侵襲が認められました。

4) 今回18例以外に線維肉腫の発生も見られていません。腫瘍間質の線維形成には特別な所見はみられませんでした。

演題3 舌癌の統計的観察

—日本病理剖検輯報に基づく剖検例の集計—

○ 佐藤 方信, 野田 三重子, 竹下 信義
畠山 節子, 守田 裕啓, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

これまで舌は全身臓器のなかでも比較的悪性腫瘍の発生が少ないもののひとつであったが、人口動態統計によれば本邦において舌癌により死亡するものは年々増加している。そこで演者らは本邦における舌癌の実態の一部を解明する目的で日本病理剖検輯報（第15輯～第17輯）より舌癌症例を集計し、若干の統計的観察

を行ったのでその成績を報告した。

日本病理剖検輯報によると1972年から1976年までの5年間に全国で行われた剖検総数は、116,070例で腫瘍(癌)の剖検総数は63,341例である。このうち舌癌(全て扁平上皮癌)剖検数は年度別にそれぞれ44例, 50例, 56例, 50例, 53例, の合せて253例(男169例, 女83例, 性不明1例)であった。これは全部検数に対する0.22%, 全腫瘍(癌)剖検例に対する0.40%である。年代別にみると60歳代が77例で最も多く50歳代が54例, 70歳代が42例, 40歳代が33例で以下30歳代21例, 20歳代が12例, 80歳代が10例と続いていた。

発生部位については記載のないものが166例あり, 残りの症例(84例)についてみると舌縁が最も多く33例(39.2%)で舌根が21例(25.0%), 舌尖4例(4.8%)舌背3例(3.6%)の順であった。また左右差についてみると男では左が17例, 右が24例, 女では左が15例, 右が7例で, 男では右側が, 女では左側に発生した症例が多かった。

転移については記載のあった231例についてみると剖検時臓器のみ転移のみられた症例は56例(24.2%), リンパ節にのみ転移のみられたのは18例(7.8%)で臓器とリンパ節に合せて転移のみられたのは126例(54.5%)であった。しかし転移なしと記載されているものが31例(13.4%)もあった。また臓器転移では肺が最も多く, 82例(35.5%)にみられ, 次いで頸部軟組織63例(27.3%), 咽頭42例(18.2%), 甲状腺32例(13.9%), 腎26例(11.3%), 肝24例(10.4%), 心23例(10.0%), 皮膚21例(9.1%), 喉頭20例(8.7%), 副腎19例(8.2%)などが多かった。リンパ節では頸部が101例(43.7%)で最も多く, 気管周囲26例(11.3%), 肺門20例(8.7%), 鎖骨上窩15例(6.5%), 縦隔15例(6.5%)となっていた。

質 問: 小川 邦明(県立中病歯科口腔外科)

舌癌は全体の癌のうち2~5%程度の発生と記憶しておりますが, 先生のDataでは全癌のうち何%程度でしたか。また年別にみると舌癌は多くなっている傾向にあるのかどうか, 御教示をお願いします。

質 問: 石橋 寛二(第二補綴)

舌癌の発生と義歯あるいは金冠との関連について報告例がございましたら教えて下さい。

質 問: 工藤 啓吾(第一口外)

死因は何が多かったのでしょうか。

回 答: 演者

小川邦明先生に対する回答:

今回は臨床的な成績については検索しておりませ

ん。剖検例でみる限りではこの5年間で舌癌は253例で全腫瘍剖検例の0.40%を占めていました。年度別に舌癌剖検数をみると44, 50, 56, 50, 53例で著大な増加はみられません。

石橋寛二先生に対する回答:

日本病理剖検輯報には義歯などの状態についての記載がありません。

工藤啓吾先生に対する回答:

舌癌症例の死因については大変興味ある問題ですが今回はこれについては検討しておりません。次の機会にご報告致します。

座長 高江洲 義 矩

演題4 Str. mutans の菌体凝集能欠損株の諸性状特に Glucan 産生について

○田近 志保子, 平田 佳子, 本田 寿子
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

我々は臨床材料から高分子量 dextran, あるいは sucrose による菌体凝集能欠損株を分離し, その諸性状を検討してきた。今回はこれら菌株の産生する Glucan を付着能の違いにより分画し, 定量を行った。合わせて G T F 活性の測定も試みた。使用菌株: D⁻S⁺, D⁻S⁻ 株2株づつ, D⁺S⁻ 株1株, 対照菌株として D⁺S⁺ の性状を有する分離菌株3株と S. mutans の標準菌株 G S 5株を用いた。各菌体凝集能欠損株が産生する glucan を付着能の相違により分画してみると D⁻S⁻ 株の産生する insoluble glucan 量は adherence, non adherence な画分共に他の菌株に比べ2~3倍多い。D⁻S⁺ 株では adherence, non adherence な画分共に insoluble glucan 量は D⁺S⁺ 株と同程度であった。しかし soluble glucan 量は著しく高く D⁻S⁻, D⁺S⁺ の 2.6~4倍近い値を示した。D⁺S⁻ 株の insoluble, soluble glucan 産生量は共に非常に低い値を示した。

各菌株を BHI broth で培養し G T F 活性の測定を試みた。Extracellular G T F, Cell-associated G T F 活性共に D⁺S⁺ 株のそれらと同程度の値を示し, 凝集能欠損株における G T F 活性の低下は認められなかった。以上の成績にもとづき菌体凝集反応と付着のメカニズムについて, 模式図を組み立てた。